小学校教員養成における音楽科の授業動画制作で培われる資質・能力

―新型コロナウイルス感染症拡大防止に伴う遠隔授業での附属小との連携による試み―

*小　畑　千　尋　**三　浦　秋　司

Competence Cultivated by Lesson Video Production for
Department of Music in Elementary School Teacher Education:
An Attempt based on Cooperation with a University Attached Elementary School
for Remote Lessons Accompanied by Prevention of the Spread of the Novel Coronavirus

OBATA Chihiro and MIURA Shuji

要　旨

新型コロナウイルス感染症拡大防止に伴い、遠隔で実施した小学校教員養成課程の授業「音楽科教育法（初等）」に於いて、本学附属小で制作された授業動画及び、その制作過程を参考にしながら、音楽科の授業動画制作を実施した。学生らが制作した授業動画及び感想の分析を行った結果、①対面時以上に、児童の反応を想像しながら授業を組み立てている、②動画撮影することにより、授業者である自分自身を客観的に捉えている、③対面でも遠隔でも必要な内容について、ICT を中心としたツールを駆使することにより、対面時と同等、それ以上の効果的な授業場面をつくっている、④遠隔で複数名で制作することにより、班員とのコミュニケーションの取り方を意識化できている、⑤学校休業時における遠隔授業を、自分事として考えられるようになった、などの将来教員として必要な資質・能力に繋がる要素がみられた。

Key words：授業動画制作、小学校教員養成、遠隔授業、附属小学校、音楽科

1　はじめに

新型コロナウイルス感染症拡大により、2020年４月から、国内の多くの大学は対面授業を実施することが困難な状況となった。文部科学省が全国の国公私立大学、高等専門学校1066校に実施した調査によると、2020年６月１日時点で遠隔授業のみ実施している大学等が60.1%、対面（面接）授業と遠隔授業が併用されている大学等は30.2%、合わせて９割以上が遠隔授業を実施している（文部科学省 2020a）。また、朝日新聞社と河合塾が全国の国公私立大学を対象に行った調査では、2020年７月上旬時、全授業の８割以上を遠隔で行っている大学が、全体の約７割を占めたことが明らかとなっている（朝日新聞社・河合塾 2020）。

宮城教育大学では４月は休校、５月の連休明けから、当分の間遠隔授業を実施することとなった。筆者は遠隔授業の経験が皆無なだけでなく、ICT 機器の扱いが決して得意とはいえない。それゆえ、この状況下で学生たちの学びを保障するために、大学の推奨する Google Forms, Google Classroom, Google Drive, Google Meet、YouTube 等をどのように紐づけたらよいのか、さらに、遠隔授業で出来ること、出来ないことを確認するための試行錯誤に多くの時間を要した[注1)]。

遠隔授業の実施方法を模索するうちに、対面授業の内容をそのまま遠隔授業に置き換えて実施するという発想自体に無理があることに気づいた。対面授業を前

＊　音楽教育講座
＊＊　宮城教育大学附属小学校

提とした活動を基に授業内容を考えてしまうと、合唱ができない、リコーダーも吹けないなど、不可能なことばかりとなってしまう。

しかし一方で、遠隔授業だからこその良さもある。たとえば、YouTube に動画をアップロードすれば、繰り返し視聴でき、各自のペースで進めることが可能となる。また Zoom のブレイクアウトルーム機能を使えば、教室内でのグループディスカッションのような周囲の話し声がなく、対話に集中できる。

筆者が担当する「音楽科教育法（初等）」は、小学校教員養成の必修授業であり、例年１クラス約50～80名ほどの学生が履修する。その学生らが一斉に歌うことはおろか、教室内でいわゆる三密状態を回避することは難しく、もし新型コロナウイルスの感染状況に応じて、段階的に対面授業を再開する時期がきたとしても、本授業をすぐに対面授業で実施することは厳しいことが容易に予想できた。例年の対面での本授業では、複数名による班ごとで授業開発を行い、授業者以外の学生が児童になりきっての模擬授業を行っていたが、この状況下で実施することは不可能となった。

すなわち、このコロナ禍で筆者が求められているのは、「遠隔授業で使えるツールを最大限に活用しながら、学生らが、将来小学校教員として音楽の授業を行うために必要な資質・能力を身につけるための内容を保障する」という発想の転換であった。

一方、宮城教育大学附属小学校（以下、附属小と略記）では、新型コロナウイルス感染症拡大防止のための休業期間中の４月半ばから、教員が授業動画を制作し、ほぼ毎日それらを児童に向けて配信した。全国的に紙媒体を中心に対応していた小学校が多い中、かなり先駆的な試みといえよう[注2)]。

しかも附属小の授業動画は、学習活動が停滞しないためというだけでなく、たとえば、入学式すら執り行われていない１年生には、教員の自己紹介や学校案内であったり、児童の運動不足を解消するために、体育部の教員がオリジナルの体操を考え、全教員が参加した動画であったり、教員らの児童に対しての教育的配慮に満ちた動画であった。

筆者が担当する「音楽科教育法（初等）」の履修者は、学部２年生が中心であり、３年次には附属小での教育実習を経験する。コロナ禍で、自分たちの実習校である附属小の教員らがどのような取り組みをしているのかを知ること、この状況下で児童の学びを止めないために方法を模索している柔軟な発想力に触れることは、学生らにとって、まさに今だからできる学びであろう。また、休業期間中の子どもたちに、どのような学びを提供できるのかを考え、可能な方法を自ら探索することは、教員になるために欠かせない資質・能力の育成に繋がると考える。さらに、GIGA スクール構想が前倒しされ、急速な環境整備が進む現在、ICT を効果的に使いこなせる教員の育成も必須である。

そこで、本授業では、附属小教員によって制作された授業動画及び、その制作過程を参考にしながら、４名から６名の班ごとの遠隔による音楽科の授業動画制作を最終課題とすることにした。

本稿では、対面授業での授業開発及び模擬授業ではなく、遠隔授業における音楽科の授業動画制作において、学生たちが教員になるための資質・能力の育成に結びつくためのどのような学びを得たのか、学生らが制作した授業動画及び感想の分析を通して明らかにすることを目的とする。

2　臨時休業期間における附属小の取り組み

臨時休業期間中における附属小の取り組みについて、特に授業動画配信を中心に表１[注3)]にまとめた。

2020年２月27日、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、政府から一斉休業の要請があり、翌週３月２日から、附属小は臨時休業となった。その後、臨時休業期間が何度も延長され、全学年登校が再開されたのは６月２日である。

授業動画配信に関しては、４月13日の段階で遠隔授業の実施を検討、２日後の15日から授業動画の制作を開始した。附属小教員らで共有した動画による授業づくりの基本的な考え方は、以下の通りである。

- 普段の本校の授業（45分で１時間）をベースとする（但し１動画の長さは、10分以内を目安とする）。
- 発問や板書など、日頃大事にしている手立てを変わらず大事にする。
- ノートを活用し、子供の学習の記録が残るようにする。
- 対面授業時から実施していた「本質に迫る授業」の実現を通して、子どもたちの「主体的・対話的で深い学び」を目指す。

そして、４月23日に授業動画の配信「Ⅰ期（４月23

表１　附属小の休業期間中における
授業動画配信を中心とした取り組み

2020年 ２月27日	【内閣総理大臣の臨時休業要請】
３月２日	【臨時休業開始】
４月６日	Google Meet の操作確認
４月13日	遠隔授業の実施の検討を開始
４月14日	研究部会にて遠隔授業の実施の詳細を検討（骨子決定）
４月15日	動画配信による授業の実施を決定、授業づくり開始
４月23日	Google Drive を活用した動画配信による授業【Ⅰ期】（4.23 ～ 5.1）開始 アクセスの集中により配信を中断、原因・改善策の調査
４月24日	動画配信の方法の変更を決定（YouTube の限定公開、URL の秘匿） YouTube の活用による方法で動画配信による授業再開
５月１日	研究部会にて遠隔授業の改善策を検討 Google Forms を活用した遠隔授業の家庭向けアンケート実施
５月８日	遠隔授業の家庭向けアンケート集計結果配信
５月13日	YouTube を活用した動画配信による授業【Ⅱ期】（5.13 ～ 5.29）開始 授業動画サイト「MAES 授業動画」の開設（週予定・授業動画・資料・振り返り・フィードバックの一括管理・提示） Google Forms を活用した学習の振り返りの集約開始、児童用 Google アカウントの取得に向けた作業を開始
５月14日	【宮城県の緊急事態宣言解除】児童用 Google アカウントの配付、家庭での端末の準備・設定
５月22日	Google Meet を活用した双方向コミュニケーション試行的実施
６月１日	学校再開
６月２日	全学年登校

日～ ５月１日）」を開始した。Ⅰ期では、１日に３または４授業（教科は国語・社会・算数・理科・生活科に限定）、１年生向けのスタート・カリキュラム授業を実施した。同時に通信環境や受信機器が備わってない家庭へのサポートとして DVD の貸出も開始した。

その後、Google Forms を活用した遠隔授業の家庭向けアンケートを実施し、子どもの取り組みや家庭の通信回線の状況の把握、今後の改善策などの検討を行った上で、授業動画の配信「Ⅱ期（５月13日～ ５月29日）」を開始した。

Ⅱ期においては、教科の枠を広げ（音楽科も含む）、全校音楽（歌唱）、全校体育（運動）、朝会など、授業以外の教育活動に関する動画の制作・配信も追加された。子供の振り返りについては、授業で使用したノートを登校日に回収し、子どもの取り組みを担任が確認することに加えて、Google Forms を用いて子どもの感想や質問を集約した。それに対して教員は、ブログや電話を活用したフィードバックも行った。また、DVD と共に、端末（iPad）の貸出を開始した。Ⅱ期の動画配信は、学校再開の前週まで継続された。

さらに、対面授業の再開準備と並行しながら、今後の新型コロナウイルスの拡大状況により、再び休業にせざるをえなくなった際への対策も行っている。たとえば、表１に示したとおり、大学との連携で各児童に１アカウントずつ配布し、Google Meet を活用した双方向コミュニケーションの試行を５月末に行っている。

3　本授業での小学校音楽科の授業動画制作の概要

本年度前期「音楽科教育法（初等）」の履修者は、小学校教員養成課程（教育学、特別支援教育を専門とするコースの学生）の学部２年生が45名、中等教員養成課程に所属し、副免許として小学校教員免許を取得予定の２ ～ ４年生５名、計50名であった。

「音楽科教育法（初等）」における、授業動画制作の過程を表２に示す。なお、授業では、音楽科教育の歴史、歌唱の発達と「音痴」克服、対話型鑑賞を用いた音楽科の授業実践、その他の内容も扱ったが、ここでは割愛する。

遠隔授業を実施するにあたり、対面授業と比較して、言語・非言語コミュニケーションの情報量が著しく減少することが懸念された。そこで、① Zoom のブレイクアウトルーム機能を用いて、当日の授業内容に関して、基本的には毎回異なるメンバーでのディスカッションを行う、②グループの代表者が主な意見を紹介し、クラス全体で共有する、③さらに、授業の最後にその日の課題や感想などを、各自が Google Forms から記入する、④ ③のコメントについては、次週の冒頭で筆者が学生全員に紹介しながら、学生の質問に答え、随時筆者の感想や追加情報などを伝えることを、毎時間行った。

表２　本授業での音楽科授業動画制作の過程

2020年 ６月８日	附属小授業動画視聴とそれに関するディスカッション
６月15日	学生の感想に対する附属小教員からのフィードバック
６月22日	授業内容の検討、制作の方法等についての説明と班ごとのディスカッション
６月29日	仙台教育事務所指導主事による、コロナ禍での活動も含めた音楽科の現状についての講義
（７月１日）	附属小オンラインによる教員対象研修会「子どもの学びを止めない」（希望学生が参加）
７月６日	附属小研修会に参加しての感想の共有、各班で制作作業
７月13日	中間発表：各班によるプレゼンと感想の共有
７月20日	各班で制作作業
（７月24日）	授業動画提出〆切
７月27日	全班の授業動画の視聴、附属小教員による講評とディスカッション（自己・他者評価）

３.１　附属小授業動画の視聴

５月27日、本授業受講学生の動画視聴の方法について、附属小と協議を行った[注4)]。学生が視聴する授業動画は、以下の５本にすることとした。

- 「附属小エクサティブ」
  配信日：５月19日
  動画の長さ：４分40秒
  概要：全校児童を対象に、休業期間中に附属小体育部の教員らが考案したオリジナルの体操。宮城県を拠点に活動する音楽グループの曲にのせて、附属小教員総出演で体操を行っている。撮影にはドローンも用いた。
- 「自己紹介」
  配信日：４月23日
  動画の長さ：８分22秒
  概要：対象は１学年。１学年担任教員らが初期に制作した動画。会うことのできない児童らに対して、教員が自己紹介をしながら、ゆっくりと語り掛けている。
- 「音楽：楽しく歌おう」
  配信日：５月14日
  動画の長さ：11分59秒
  概要：１学年を対象に１学年担任教員が制作した。動画中で用いている《おなかの体操》は、附属小の児童が、毎日朝の会で歌っている発声練習の歌である。１学年の担任教員全員で《セブン ステップス》をリズミカルに踊りながら、歌う。
- 「音楽：動きながら楽しく歌おう」
  配信日：５月25日
  動画の長さ：９分８秒
  概要：１学年を対象に１学年担任教員らが制作、出演している。《おなかの体操》《おつかいありさん》に加え、《チェッ チェッ コリ》では、歌いながらの身体表現を行うが、徐々に音楽のテンポが速くなったり、動作が複雑になったりと、段階的に動きが難しくなる。
- 「楽しく絵をかこう」
  配信日：５月14日
  動画の長さ：①９分56秒、②３分24秒
  概要：２学年の図工担当教員が制作した「デッサン」を扱った授業。導入にミケランジェロの絵を用いるなど、デッサンの世界に引き込まれる。説明の際に手元を拡大して撮影するなど、カメラのアングル等にも工夫がなされ、児童がひとりで自宅にある素材を用いて描ける工夫が随所になされている。

６月８日、受講学生らは、臨時休業期間における取組一覧（宮城教育大学附属小学校 2020a）、附属小の授業動画制作の過程をまとめた「動画配信による授業の実施フローチャート」（宮城教育大学附属小学校 2020b）の資料を参照しながら、上記の授業動画を各自視聴した。その後、本授業内でグループディスカッションを行った。

全学生がGoogle Formsから記入した視聴後の感想は、附属小と共有した。身近な附属小の教員らが、果敢に取り組む姿への感動や尊敬の気持ちを記す感想が多くみられた。学生の質問、感想に対しての附属小教員からのコメントは、翌週６月15日の授業冒頭で学生らに伝えた。

３.２　音楽科の授業動画制作に向けて

６月22日の講義において、授業動画制作の方法についての説明を行った。概要は以下のとおりである。

１）附属小の授業動画及び制作に関連する資料を参考にする（附属小の授業動画については、YouTube

で常に視聴できる状態にした)。

2）題材は、①１学年の「せんりつでよびかけあおう」から《やまびこごっこ》、②２学年の「せいかつの中にある音を楽しもう」、③３学年の歌唱共通教材《うさぎ》、④ その他（特別な配慮を必要とする児童への音楽科の授業、音楽科と他教科との教科横断的内容など）から選ぶ[注5)]。

3）指導案（略案）を作成する。ワークシートなどの資料を作成し、添付することも可能。

4）動画について

- 動画の長さは７ ～ 10分にする。
- 大学キャンパスへの入構が禁止されている状況を鑑み、班員が集まって打ち合わせ、撮影などは行わず、遠隔でのやり取りで進める[注6)]。
- 動画には字幕もしくは、それと同等以上の情報保障を工夫する[注7)]。

4　遠隔で学生が制作した音楽科の授業動画

班ごとに制作された授業動画10本については、全受講生と附属小教員が視聴した。７月28日の授業では、授業を視聴しての感想を共有し、動画を視聴した附属小教員もオンライン授業に参加し、視聴しての講評を学生たちに伝える機会を持った。

各班が制作した授業動画の中から、ここでは、２本の授業動画について、班員が制作した学習指導案（略案）を基に紹介する。

4.1　A班「身体表現を通して音楽を楽しもう」

対象学年：知的障害のある小学３・４学年

題材の目標：

- 教員と一緒に音楽活動をする楽しさを感じる。
- 音楽表現を楽しむために必要な身体表現の技能を身につける。
- 障害による筋緊張、発音の不明瞭さ等個々の苦手部分の改善･克服や、自分のできる範囲を理解する（自分理解）。（自立活動と合わせた指導）

本時（４時間構成の第４時）のねらい：

- 《とんくるりん　ぱんくるりん》を用いて、歌と身体表現を行い、映像の中の教員らと合わせられるようになる。
- 自分のできる動きを自分で理解し（自分理解）、その動きを実際にやってみる（筋緊張緩和と身体表現技能の習得）。
- 音楽を楽しみながら身体表現ができるようになる。

制作した動画の長さ：７分00秒

動画制作で使用したICT機器：スマートフォン（iPhone）

動画制作で使用したソフト・アプリ：VLLO、MIXCHANNEL、PicPlayPost

字幕作成に用いたアプリ、サイト等：VLLO

授業動画の概要：発達障害教育コースの学生５名が自身らの専門性を活かして制作した動画である。各活動における音源は、５名が各自で歌いながら踊り、ビデオ撮影したものを編集した《とんくるりん ぱんくるりん》を用いている（図１参照）。教員の動きを一例として示し、最終的には各児童が歌いながら、自分の身体表現を行うことを目的としている。

Ａ班が作成した指導案（略案）からは、たとえば、「言語性短期記憶のある児童に配慮しながら、視覚的にわかりやすいように題材名をタブレットで示す」、「動くものに目が行くことを利用して編集で動きもあるものも使う。身振り手振りや朗らかな表情を通して子どもたちの興味を画面に向かせる」、「簡単バージョンの身体の動きの復習（座りながら）」（図２参照）と「難しいバージョンの身体の動きの復習」（図３参照）の活動では、「視聴する児童が一つの画面に集中できるように一人の先生を映す」など、動画全体を通して、視聴する児童への配慮がなされている。

また、「児童がこの動画を見てやりたい動きを見つけてくれることを重視するなど、一人ずつ見る際には巻き戻してみるように保護者などに伝えておく（オンデマンド方式を活用する）。対面授業であれば、子どもたちの動きに先生側があわせることをしたい。今

図１　５名で踊りながら歌う

図２　座って歌いながら踊る

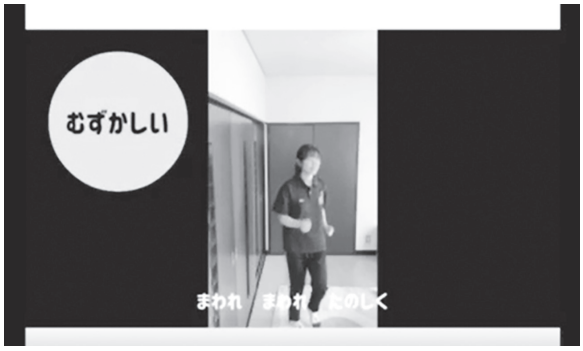

図３　全身を使って歌いながら踊る

回はオンデマンドでそれができないため、配慮として様々な動きを児童に提示し、その中から児童が選んで自分の身体表現ができるようにした」など、対面授業での活用も念頭に置きつつ、授業動画を制作していることが分かる。

さらに、保護者の協力を得て動画を送信してもらう設定にしており、その理由として、「①先生が児童の様子を確認するため、②学校再開後の朝の会に活用するための材料とするため（後々の復習につかう）」と記している。

４.２　Ｂ班「せいかつの中にある音を楽しもう」

対象学年：小学２学年

題材の目標：身の回りにあふれている音の存在を認知し、表現できるようになる

本時（３時間構成の第２時）のねらい：表現の多様性への理解や想像力を活かして、自身を表現できるようになる

制作した動画の長さ：９分00秒

動画制作で使用したICT機器：パソコン（Windows）、スマートフォン（iPhone）

動画制作で使用したソフト・アプリ：iMovie、PicPiayPost、Phonto

字幕作成に用いたアプリ、サイト等：YouTube

授業動画の概要：５名で制作された本授業動画は、遠隔で撮影されたにもかかわらず、２名が対話しているように編集されている（図４参照）。また、「ペットボトルに音を集める」という想定で、ペットボトルをバトンとしてタイムワープしているかのごとく演出がされ、テンポよく授業が展開する。

それぞれの教員が、家の中の音を探す場面では、視聴している児童が一緒に音を探す感覚が持てるアングルで撮影された（図５参照）。その際、生活音（例えば炊飯器の蓋を閉める音）を聴かせた直後に「カチャ」などの擬音を発するという一連の動きが、動画を視聴していてストレスなく、聴取と表現の活動がスムーズに繋がっている。「『上手く表現できなかった、忘れちゃったっていう人は動画を止めてもう一度確認してみよう』と声がけをして、自発的な学習を促す」、「教員が提示する例を参考に、これから自分が声で表現する題材を決定」する活動では「児童が理解しているかいないか随時確認していくことが難しいため、場面例をいくつか提示する」など、動画を視聴している児童の認識に目が向けられている。

「順序を提示してその通りに進めることで完成に導くワークシート」の作成、活用も行っている（図６参照）。ワークシートは、「絵で表すことを対面授業での発表活動と置き換える」ことを意識したものであり、「友達や家族に発表してどの場面か当ててもらおう」と書き添えてあり、家庭内で共有することも想定している。さらに「第１時の復習かつ発展の役割を担い、また、第３時（最終時間）でのまとめ（動画制作）の発表原稿」となることも目的であり、実際にGoogle Formsの提出フォーム（図７参照）を作成し、「スキャンや画像で教員に送ることが可能であれば実行し、次回の授業で共有する」設定とした。

図４　２名で対話しながら進行する

図５　自宅の台所で水の音を見つける場面

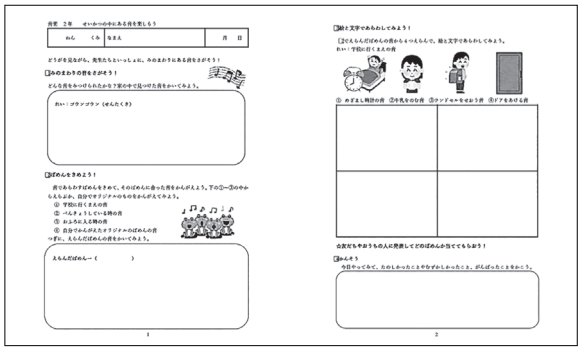

図６　動画視聴しながら用いるワークシート

図７　ワークシートの提出先（Google Forms）

４.３　授業動画を制作しての感想

１）授業動画制作、全班の授業動画を互いに視聴した後の、Ａ班、Ｂ班の学生（計10名）の授業動画制作を通しての感想を表３に示す。

表３．音楽科の授業動画を制作しての感想　＊文頭のアルファベットは班を示す。太字は筆者による。

[A1] **最初にこの課題を聞いたとき、私たちができるのだろうかという不安**が強かった。(中略) YouTube で聞いた音源を基に**高校で培った相対音感を活用してピアノ伴奏をなんとか撮影**し、ほかの人にもそれを基に歌ってもらうことで音源を完成させることができた。**テンポを合わせながら歌う難しさがある中でメンバーがうまく撮影**してくれてとても感謝している。障害を持つ子供たちはどうしても興味がないと見てもくれないかもしれない。それについては私たちが楽し気に行うことで気を引けないかという案があった。(中略)**自分で自分の撮影した映像を見たときに、思っているほど表現ができておらず楽しさを感じなく繰り返し撮影し直した。その点で伝えたいことは大げさに、児童になりきるくらいの勢いで話したり動いたりすることが大切である**と学ぶことができた。さらに**仲間との情報共有というのはとても大切**であると感じた。立って撮るのか座って撮るのか、イヤホンをつけるとか、工夫点もうまく共有できていなければもったいない結果になる。(中略)**自分が頑張りすぎるのではなく、ある程度周りの友人・仲間を信じて任せることも必要**なことだと感じた。自分だったらできなかったであろうことをその人はいとも簡単に行うかもしれない。**その人の得意や不得意を考慮しながらお願いをすることで「みんなで作り上げた授業」である意識を持つことができる**と思った。(中略)**授業のアイデアというのは日常のいたるところにある**のだなと感じた。他のグループの授業を見て感じたこともあるが、日常にあるものを一つ工夫することでそれが最高に面白いものになるかもしれないという意識をもって周りを見ることがとても大切だと学んだ。**自分たちが企画した動画が徐々に形になってほかの人に楽しんでもらえる、評価してもらうことはとても素晴らしい経験**となった。(後略)
[A2] **授業を作るのが初めてで、さらに遠隔での授業というのは未知であり、作れるのか不安**な部分がありました。しかし、**学習指導要領を基にグループで話していくうちに指導したい内容が決まり、楽しんで授業を制作**することができました。対面の授業ではできない**複数人での制作は、多くの考えが出て、児童にとってより良い授業を作り出すことができる**と思いました。**特別な支援を必要とする子どもへの授業を考えた時に、どのくらい自由度を高くするかが重要**であると学びました。自由すぎても考えが思いつかない子や真似をすることも筋緊張でなかなか動かしにくい子もいます。**遠隔で授業する場合、児童の様子が見られないので、声掛けや動作がとても大事**になることが分かりました。**遠隔授業では対面していない分、分かりやすいような工夫を沢山考えましたが、これは対面授業であっても同じ**ことだと感じました。(後略)
[A3] 私はまだ模擬授業や授業づくりを一切やったことが無い状況で、初めてオンラインで授業動画の作成をしました。**最初は作ることができるのか不安**がありましたが、**グループでの話し合いを進める中でみんなで意見を出し合い、少しずつ形が出来上がり、まだまだ一人ではできないことでもみんなで協力すれば形になる**のだと感じました。(後略)
[A4] 私の班は、知的障害を持つ子供に対してオンライン授業という環境の中でどのような授業を行えるか考えました。オンラインならではの音楽の授業ということで、様々なアイデアをみんなで出し合いました。**自分の中で考えていたものをみんなに伝えるとみんながより良いものにしてくれて、自分の考えの幅が広がりました**。授業動画では編集と出演をやりました。(中略)対象が知的障害児だったので、**知的障害児に対する情報保障や分かりやすさを意識したのですが、結果的には誰にでもわかりやすく編集できた**と思いました。合理的な配慮を音楽の授業動画の中で盛り込めたと思います。**動画出演をしてみて、自分がにこやかに話していると思っていても、動画を見ていると固かったり、笑顔が足りなかったりと自分が思っていた表現の仕方ができていなかった**と気付きました。これもオンライン授業での動画作成だったからこそ気付けたことだと感じました。
[A5] (前略)**短い時間の中で、内容をどうまとめればよいのか、詰め込み過ぎず程よいボリュームにするのがとても難しい**なと思いました。**オンラインだと双方向になりにくく、教員側からは子どもの取り組みの様子が見えないため、動画の中で子どもが考える時間を取ったり、動画を一度停止するという声掛けをしてみたりしてもよかったな**と思いました。**子供たちの実態に合わせて授業を進める姿勢、子どもに寄り添う姿勢が大切**だと感じました。また、動画を撮影しているときに、**自分では楽しくやっているつもりでも、録画した動画を見たらあまり楽しそうに見えず、動きも小さかったので何回も撮り直し**をしました。**客観的に自分が話したり、歌ったりしている姿を見ることができ、オンラインでは特に、自分が思っている以上にオーバーな感じで動いたほうがいい**のだと気が付きました。また、**グループで作成したため、それぞれの得意分野を生かし、効率的に作成を進める**ことができました。このことから、**教員も一人だけで頑張るのではなく、みんなでアイデアを出し合い、協力することの大切さ**を学びました。また、他の班の動画を見ても学んだことがたくさんありました。**オンライン授業では、教員の顔が見えることで子どもたちの安心感につながる**と感じました。(中略)普段は動画を視聴する側なので、制作する側の体験もすることができてよかったです。**今回の反省や振り返りを踏まえ、もう一度授業動画を作成したい**と思ったし、**この経験は必ずほかの教科や将来教員になった時の授業にも生きてくる**と感じました。(後略)
[B1] いかに**反応を見れない子どもの存在を意識して動画が作成できるか考えるのが何よりも難し**かった。はじめは進行役の掛け合いも、ペットボトルもフォームも考えてはおらず、淡々と音探しをする授業になると思っていたが、**話し合いを重ねるうちに「オンラインでも気分は教室みたいな動画」を軸に制作したいという気持ちが生まれていき、追加でアイデアが生まれていった**。まだまだ未熟ではあるが、オンラインの特性を充分に取り入れた学び多き動画が制作できたのではないかと感じている。昔から度々やってきた**動画編集のスキルを大いに生かせた**ので良かったです！
[B2](前略)今回制作した授業動画は、何度か子どもたちに呼びかける場面を作りましたが、**実際に自分がカメラの前で「みなさんできましたか？」と話してみると、ここに子どもたちがいたら反応を確かめながら不安を解消していけるのになと思いました**。また、**自分たちでいちから授業を作ったのは初めてだったので、言葉の選び方や話し方の工夫が難しかった**です。特に私は今回進行役に挑戦したのですが、**完成した動画を見てみると少し声が小さかったりモゴモゴしたりしたところがあった**ので、そこがとても悔しいです。**子どもたちが目の前にいることを想定しながらもっとハキハキと話せたら良かった**と感じました。**一連の授業作りを通して、今回初めて実際に子どもたちに話す際の注意点やワークシートを使うタイミングの難しさ、また映像授業ならではの工夫点について学ぶことができました**。他のグループの動画からも、自分では考えつかなかった進め方や動画の使い方に気づき、とても興味深かったです。
[B3] **オンラインのみだと話し合いの中でタイムラグや時間の制約などがあり、内容や意見を随時確認するが、やはり解釈に差が生じやすい**と感じた。**しかし、だからこそどうしたら相手の伝わるかをじっくりと考えることができた**ように思う。また、**どんどん完成に近づくのが動画として目に見えて分かるため、対面とは違う達成感があった**。授業制作自体に関して主に指導計画を担当したのだが、寝ずに試行錯誤するほどはっきり言って苦戦した。「これは対面の要素が強すぎてオンライン授業として成り立ってない」「第１時の授業が第３時につながらない」など、様々な思考がぐるぐるとした。これを実際はどのくらいの時間で制作しているのか気になる。また、自分が主に指導計画を考えたこともあり、最も授業のイメージができているとして、ワークシートや動画のシナリオも担当したのだが、**大まかにイメージを提示した際に班員がそれを埋めて完成させていくのがさすがだと思った**。
[B4] **オンラインだからこそできることや、オンラインだからこそ伝わりにくいことについて考えることができた**。どれだけ、見てる人を飽きさせないためには、**声色やテンションに気をつけ、授業の展開も分かりやすくする必要がある**と感じた。
[B5] **私は授業を作ること自体初めてだったので不安があった**けれど班の人が協力的で本当に良かったと思いました。個人的には自分の家で動画をとるということに少し抵抗があったけれど、これからはスタンダードになっていくのだろうと思いました。（中略）大切なのは取り組む姿勢だということを強く学びました。(後略)

２）本授業の最終回に、「本授業はすべて遠隔（オンライン、オンデマンド）で行われました。現在のあなた自身の率直な感想に一番近いものはどれですか？　１つ選んで下さい」という質問を、Google Forms を用いて受講者全員に行ったところ、有効回答48名中（受講者50名）、「遠隔授業の方が自分にとっては良かったと思う」が22.9%（11名）、「遠隔授業でも良いかなと思う」が64.6％（31名）、「対面授業の方が自分にとっては良かったと思う」が10.4%（５名）、「その他」が2.0%（１名：「遠隔授業にも対面授業にも良さがあるのでどちらでもよい」）という結果となった。

5　考　察

学生が制作した授業動画には、附属小の授業動画の視聴が大きく影響していると考えられる。たとえば、附属小の動画による授業づくりの基本的な考え方、附属小の授業動画にみられた特徴（通常の授業でも活用できる内容となっている、画面の前の子どもたちに話しかけ、子どもが返答する間を取る、学年全員の教員が全員で歌う・身体表現をする、焦点を当てて見てほしい場面を拡大して撮影する他）は、本稿で対象とした２つの動画にも多々活かされている。また、附属小の授業動画視聴後の感想では、教員の表情、動作について着目した感想も多くみられたのだが、そのモデルを視聴していたことが、自身の動画を見たときに（意識的であれ、無意識的であれ）、自身の表現に着目することに繋がりやすかったと考えられる。さらに、動画制作後、附属小の教員に自身が制作した動画について評価してもらったことで、授業づくりに必要な要素や、動画を視聴する子どもたちの取り組みのイメージ化について、考えを深めることに繋がった。

以下に、学生が制作した音楽科の授業動画及び感想からみえる、本課題の遂行を通して得た学び、ひいては将来教員として必要な資質・能力に繋がると考えられる要素を挙げる。

第一に、児童が視聴することを想定し、児童の反応を想像しながら授業を組み立てていることである。オンデマンドの動画による授業では、対面授業のような児童の瞬時の反応は一切ない。カメラに向かって話しかけても、児童の反応がない中で展開していくことの難しさを、学生たちも実感している。しかしながら、筆者が昨年度までの対面授業で実施してきた、班ごとによる授業開発及び模擬授業と比較すると、例年と同様、もしくはそれ以上に、児童の認識に着目して授業が構成されている。

対面での模擬授業での難しさとして、まだ教育実習を経験していない学部２年の大学生には、授業観察などの経験が少ないこともあり、模擬授業で、児童の反応を想像し、児童になりきることが難しいことが挙げられる。その結果、児童役の学生たちの反応が中途半端で、ある意味学生同士のなれ合い的な雰囲気にもなり得る。

オンデマンドの授業動画では、児童の反応が一切ないからこそ、制作する際に、児童の認識や反応を想定することに、より注意を向けることになるのではないだろうか。表３の感想からも分かるように、本授業履修生の多くは、教科問わず授業づくりの経験が初めての学生であり、現時点では、対面時の模擬授業との比較をすることは難しい。しかし、結果的には、動画を視聴する児童を意識し、その児童の認識に目を向け、配慮の行き届いた内容となっている。

第二に、授業者である自分自身を客観的に捉えている。表３から分かるように、Ａ班、Ｂ班の学生の多くが、自身の発声、表情、動作などを客観的に見ようとしている。模擬授業に限らず、ピアノなどの実技の授業でも同様であるが、対面授業において、自分自身の演奏をスマホ等で撮影し、奏でた音色や姿勢などを客観視することを推奨しても、学生から「何度も録画し、確認した」という話はあまり聞かない。このように自分自身を敢えて動画で撮影したり、動画を見直したりすることに躊躇する傾向は少なからずみうけられる。

しかし、複数名が協力しての動画制作では、何度も見直すことが可能となり、「録画したからには、より良いものを創りたい（残したい）」という意志も生まれるであろう。さらに今回は、制作した動画を、附属小の教員及び全受講者が視聴することが事前に周知されていた。他者から評価されることについては対面での模擬授業と同じであるが、録画してアップロードすれば、何度も繰り返し視聴できる状態となる。それらの要因が重なり、自分自身を客観視せざるを得ない状況を創り出したのであろう。そして、学生が自身の表現に向き合い（向き合わざるをえない状態となり）、結果的に彼らの表現力向上に繋がっている。

第三に、対面でも遠隔でも必要な内容について、限られた環境下であっても、ICT を中心としたツールを駆使することにより、対面時と同等、それ以上の効果的な授業場面をつくっている。

たとえば斉唱は、対面授業であれば、その場で班員が一緒に歌うことで実施できる。しかし、表３の A1の記述から分かるように、遠隔での多重録音では、最終的にタイミングが合うことを想定しての伴奏の録音、各自の録音、さらに編集など、膨大な時間がかかる。しかし一方で、本人たちが何度も録画し直せることから、納得のゆく動画素材を完成させることができる。何より、出来上がった動画（音源）を繰り返し使うことが可能となる。実際Ａ班は、７分の動画中の異なる場面で、自分たちの制作した多重録音の音源を４度効果的に使用している。

また、Ｂ班のワークシートや児童に動画を提出させる内容からは、瞬時に教員との共有ができずとも、家族との共有を促す発想が学生に生まれていることが分かる。

さらに、A2は「遠隔授業では対面していない分、分かりやすいような工夫を沢山考えましたが、これは対面授業であっても同じことだと感じました」、A4は「知的障害児に対する情報保障や分かりやすさを意識したのですが、結果的にはだれにでもわかりやすく編集できた」と記述している。このことからは、学生が、授業動画のみに留まらず、対面授業や対象が異なる指導への応用についても意識できているといえるであろう。

第四に、遠隔で複数名で制作することにより、班員とのコミュニケーションの取り方を意識化できた。

本課題では、学生たちは、打ち合わせを対面で実施することができなかった。しかし、表３の感想からは、遠隔のコミュニケーションで、対面時のような雰囲気やその場の空気感を感じることが難しいことに気づき、その違いに苦慮しながらも、仲間とのコミュニケーションにおいて大切に思うことや、仕事の分担等についても意識できていることが興味深い。

第五に、学校休業時における遠隔授業を、自分事として考えられるようになった。

緊急事態宣言が出された後、具体的にどのように対応するかは各小学校、各地方自治体に委ねられた。その結果、地域間、学校間による格差がかなり生まれたと考えられる。これまで経験したことのない状況に突然置かれたことによる教育現場の混乱は、教員を目指す学生たちにとっては、決して他人事ではなかったはずである。奈須（2020）が「学びは常に具体的な文脈や状況の中で生じている」と指摘しているように、「自分自身がこの状況下で教員だったら、子どもたちにどのようなことができるのか」を考えることこそが、今まさに現実に感じている文脈と結びつく学びであったといえよう。

表３の記述からは、当初は授業動画を制作することに不安のあった学生が少なくなかったこと、しかし、自身も大学に通学できない状況下で、複数名の仲間と協働しながら創造力を働かせ、動画撮影、編集のために無料のアプリを柔軟に使いこなし、授業動画を制作していくプロセスを経て得たものを、本人たちが実感している様子がうかがえる。

6　おわりに

本授業でのアンケートでは、「遠隔授業でも良いかなと思う」「遠隔授業の方が自分にとっては良かったと思う」と回答した学生が、「対面授業の方が自分にとっては良かったと思う」よりも圧倒的に多かった。遠隔授業を開始した５月には全く想像できなかった結果である。斎藤（2020）が、オンラインの画面について、「距離感がなくフラット化された分だけ、発言の平等性が担保されるかもしれない」と指摘しているように、周囲からの同調圧力を感じないことを理由として書いている学生もいた。また Zoom を用いたグループディスカッションが、対面時のそれよりも話しやすいと言う学生も多くみられた。

対面とは異なる緊張感の中で、学生、教員が協力しての本授業での学びを、アフターコロナにおける授業に於いても活かしていきたいと考える。

謝辞

本授業において、全面的なご協力下さった宮城教育大学附属小学校の先生方、そして、本授業での活動及び感想を含めて掲載することを快諾してくれたＡ班、Ｂ班の学生を含む2020年度前期「音楽科教育法（初等）b」受講生の皆さんに、心から感謝申し上げます。

注

1）筆者にとっての大きなハードルの一つは、遠隔授業で音楽を共有するための方法を模索しなければならなかったことである。対面時には当たり前のようにできていたことができないことが分かった。たとえば、オンラインでは、対面時のようにリアルタイムで同時に歌うことは、ほぼ不可能である。学生たちが同時に発声したとしても、それをすべて同時には出力できず、斉唱、合唱を行うことが難しい。それ以上に、かなりのタイムラグが起きてしまい、たとえばオンライン上で学生が歌うのに合わせて、教員が首を振ったとしても、学生が視聴する画面では半拍ずれるなどしてしまう。また、プロジェクターで投影した動画を学生たちが視聴し、その後に再びその動画について話す、というようなごく普通の流れが、オンラインでは難しい。動画、音の共有は可能であるものの、動画がスムーズに再生されなかったり、画面と音のタイミングがずれてしまったりする。原因は、Wi-Fi の通信環境、一度にアクセスする学生の数などが考えられるそうだが、何度試してもスムーズに再生されることの方が少なく、授業内で活用することは諦めた。動画は事前に YouTube に限定公開、もしくは非公開の限定（受講生のアカウントからのみ視聴できる）でアップロードし、学生たちが直接アクセスする形にして、できるだけ安定した状態で視聴できるように心がけた。なお、オンラインでの双方向のやり取りでは、学内の許可を得た上で、Zoom を用いることとした。

2）ちなみに、文部科学省が全国の公立小学校を対象に行った調査（文部科学省 2020b）によると、臨時休業期間中に「学校が課した家庭における学習の内容」として、同時双方向型オンライン指導を実施したのは８％であるが、「学校独自で動画制作した」は選択肢にない。宮城教育大学附属小は国立であるので回答は行っていないが、「その他」の２％に該当する。

3）宮城教育大学附属小学校（2020a）「新型コロナウイルス感染症拡大予防のための臨時休業期間における本校の取組（５月末まで）― 先が見通せないときでも 子供の学びを ―」を基に作成。

4）附属小の授業動画配信は、基本的に附属小の児童、本学の教員に限って公開されていた。そのため、本授業では、附属小の授業動画を YouTube の非公開（の限定公開）でアップロードし、さらにそれらを再生リストとしてまとめた URL は限定公開の設定にし、２重のセキュリティーをかけた。また、聴覚に障害のある受講生への情報保障として、すべての動画に字幕を付けた。

5）教科書は、附属小で採用している教育芸術社の『小学生のおんがく（音楽）』を用いた。

6）具体的には、メール、もしくは Google Drive に共有ドライブを作成し、その中でファイルのやり取りする、打ち合わせには、Google Meet や Zoom を用いる、試作動画等は YouTube に限定公開でアップロードするなどを例示した。

7）字幕は動画を視聴する児童に対してではなく、聴覚に障害のある受講生のためのものである。なお、字幕の付け方については、動画編集ソフト、YouTube 上で字幕をつけられることなどを例示した。

文献

朝日新聞社・河合塾（2020）『2020年「ひらく 日本の大学」緊急調査―調査結果報告書―』共同調査「ひらく 日本の大学」事務局

小原光一他（2020）『小学生のおんがく１』教育芸術社

小原光一他（2020）『小学生の音楽２』教育芸術社

小原光一他（2020）『小学生の音楽３』教育芸術社

斎藤環（2020.８.１）「シリーズ　疫病と人間」毎日新聞朝刊13版 p.14.

奈須正裕（2020）『次代の学びを創る知識とワザ』ぎょうせい

宮城教育大学附属小学校（2020a）「新型コロナウイルス感染症拡大予防のための臨時休業期間における本校の取組（５月末まで）― 先が見通せないときでも 子供の学びを ―」 http://fu-syou.miyakyo-u.ac.jp/study/R2_torikuminennpyou0611.pdf（2020年８月19日検索）

宮城教育大学附属小学校（2020b）「動画配信による授業の実施フローチャート」 http://fu-syou.miyakyo-u.ac.jp/study/R2%200508furotyato.pdf（2020年８月19日検索）

文部科学省（2020a）「新型コロナウイルス感染症の状況を踏まえた大学等の授業の実施状況（令和２年６月１日時点）」 https://www.mext.go.jp/content/20200605-mxt_kouhou01-000004520_6.pdf（2020年８月19日検索）

文部科学省（2020b）「新型コロナウイルス感染症の影響を踏まえた公立学校における学習指導等に関する状況について（令和２年６月23日時点）」 https://www.mext.go.jp/content/20200717-mxt_kouhou01-000004520_1.pdf（2020年８月29日検索）

（令和２年９月30日受理）